

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第94号 2021年 (令和3年) 7月31日発行

—— 東洋音楽学会 西日本支部 定例研究会のご案内 ——

2回分をお知らせしますので、ご注意ください。

オンライン開催のため事前申込が必要です。参加方法は、次頁をご覧ください。

第289回定例研究会

日時：2021年 8月22日 (日)

13:30~16:30 場所：オンライン開催

日本音楽学会西日本支部第53回 (通算404回) 定例研究会と合同開催

○第31回 (2019年度) 小泉文夫音楽賞
受賞記念講演

*リチャード・エマート

*一般財団法人 民主音楽協会

*東京藝術大学音楽学部 小泉文夫記念資料室 (特別賞)

○リレートーク

金城 厚、時田 アリソン、権藤 敦子
今回で最後となった小泉賞を振り返り、講演者・フロア参加者とともに、小泉学の未来を展望します。(60分)

司会：中川 真 (大阪市立大学)

例会担当：竹内 有一 (東洋音楽学会)
齋藤 桂 (日本音楽学会)

第290回定例研究会

日時：2021年 9月18日 (土)

14:00~16:00 場所：オンライン開催

○研究発表

アレヴィーのデイシュにみる聖者崇敬
—歌詞と旋律の様式の分析から—

鈴木 麻菜美 (京都大学)

○修士論文発表

1. 民俗芸能 復活の諸相 —桂六斎念
仏を一事例として—

志川 真子 (京都市立芸術大学)

2. 奏法から見る地歌三味線の音楽的
特性 —組み合わせの多様性と左手
奏法による旋律構成に注目して—

三好 真利子 (京都市立芸術大学)

司会・例会担当：田中 多佳子
(京都教育大学)

参加方法：事前申込制。

東洋音楽学会（西日本支部）ウェブサイト（<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>）に掲載した「申込先」より参加フォームに入力して参加をお申し込みください。申込可能期間は、

・8月例会 8月3～19日

・9月例会 9月1～15日

となります。申し込まれた方には、参加のための詳細情報を追って電子メールでご連絡いたします。

定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第288回定例研究会

日 時：2021年3月6日（土）14:00～16:00

場 所：オンライン開催

例会担当：岡田 恵美（国立民族学博物館）

○研究発表

1. インド北東部ナガランド州の歌唱文化にみる特殊性：なぜポリフォニーなのか？

岡田 恵美（国立民族学博物館）

〈要旨〉

インド北東部ナガランド州は、ミャンマーとの国境に位置する。州人口約198万人の内、84.2%はモンゴロイド系民族のナガ（Naga）で、インド憲法によって指定トライブ（Scheduled Tribe）に認定されている。同州では、1947年のインド独立以降もインドからの分離独立闘争が半世紀近く続き、それによって地元経済の停滞や、雇用・教育機関の不足による若者の流出が進み、社会の閉塞感からドラッグやHIV感染者の増加という深刻な問題を抱えてきた。2000年代に入ってから、紛争地域というイメージからの脱却や地元経済・文化の復興を目的とした地域振興政策が活

発に行われている。

ナガランド州の音楽文化は、インドの他地域とは一線を画し、その特殊性が際立つ。その多層的な音楽文化は、1) ポピュラー音楽、2) 教会音楽、3) ナガの伝統歌唱に大別される。ポピュラー音楽文化の脈絡では、2004年に州政府の音楽振興局の設立と同時にインド初のポピュラー音楽振興政策が推進され、大規模なロック・フェスの開催やミュージシャン支援活動が活発化し、音楽産業や音楽教育産業が萌芽した。同州において音楽家や音楽学習人口が高い一要因として、州民の約9割がバプテストを最多としたキリスト教徒であり、日曜礼拝での讃美歌合唱や幼少からの教会での音楽活動が影響している。また西洋の教会音楽がそのまま浸透した背景には、ナガ社会が南アジアにおいて稀少なポリフォニーの伝統歌唱文化を継承してきたことも関連している。村人は棚田での農作業中など様々な場面で即興的に声を重ね、まるで対話するかのように共に歌うことで労働の疲労を癒し、山地の暮らしに必要な相互扶助の精神がそうしたポリフォニーの歌の中に息づいている。

本発表では、こうしたナガランド州の音楽文化の特殊性に言及した上で、ナガの中でもナガランド州南部に居住するチャケサン・ナガが伝承してきた伝統ポリフォニー歌唱「Li (リ)」に着目し、その音楽的要素や歌詞の特徴に関する分析と同時に、南アジアでは稀少な歌唱形態であるポリフォニーが、なぜチャケサン・ナガ社会の中で発展してきたのかについて分析した。その結果、村や地区のコミュニティへの分配・貢献を重視する伝統的な社会構造や、協働作業を必須とする地形やそこでの集団における労働システムが彼らの歌唱文化と関わり合い、共に歌うという行為自体が、連帯や相互扶助を強固にする社会的役割を担っていると結論付けた。

〈傍聴記〉

これまでも何回か、同氏による本研究関連の発表や論考に触れて来たが、その度、情報がより整理され、研究の深まりが見られる。巧みなプレゼンテーションを通して、目に鮮やかな緑の大自然と、透明感のある女声のハーモニーが文句なしに美しく迫って来ると同時に、自らが研究対象としてきた「インド的なもの」との異質性を強く感じていた。したがって、今日インドの一州に位置付けられているとはい

え、「モノフォニー中心の南アジアにあってなぜポリフォニーか」という問いには違和感がある。ナガの人々が独立を叫びながらも、歴史的にも文化的にもそれまで関係が希薄だったインドに、20世紀後半に武力によって強引に組み込まれてしまったことに未だに抵抗感を抱き続けているとの説明があった。であれば、発表終了後の質問もそこに集中したように、いわゆる照葉樹林文化圏における中国の少数民族や台湾のブヌン族等の合唱と対比しながら「なぜポリフォニーなのか」と問う方が自然ではないだろうか。

また、キリスト教音楽の影響について、ローマカトリックはインドで英語を用いたモノフォニー音楽の布教に留まり、他方、1872年に初めて教会を築いたナガに広まったバプテストはトライブの言語を用いてポリフォニックな音楽で布教に成功した。それも、「同じ南アジアでありながら」と対照せずとも、彼らが伝統的にポリフォニー感覚に優れていたから、教会の和声的な音楽はなじみやすく楽譜もすぐに読めるようになった。教会がそれまで男性の文化的継承の場であったモランに代わるコミュニティ・センターとして機能するようになった、とそのまま理解して良いのではないか。

ジョルダーニアや小泉文夫の論をひきながら、「高度の高い山岳部の狭い棚田で水耕稲作を共同で行う労働形態」に共通する「無階層集団の生存戦略」という結論だけではもの足りない気がした。「楽器はタティという弦楽器と口琴くらいしかない」との説明があったが、それは「しかない」のではなくそれらの楽器を「選んだ」と見るべきである。口琴の自然倍音列から協和感覚を得る可能性は大いにあるわけで、「なぜ楽器だけでなく声による音楽を中心にしたのか」、「協和感覚はどこから身についたけたのか」というところから、その音楽的感覚形成の根本的理由を是非解明して欲しい。

近年、急激に外国人に開かれるようになったとはいえ、交通手段も言語的にもなかなかアクセスしにくい地での、現地調査に基づく報告に触れられるのはとても貴重で有難く、研究の進展と新たな報告を期待したい。 (田中 多佳子 記)

2. 「ワールド・ミュージック」のなかのインドネシア音楽

—日本の音楽評論家たちの言説空間—

金 悠進 (国立民族学博物館)

〈要旨〉

1980年代から90年代前半にかけて、なぜ日本ではインドネシアの大衆音楽に注目が集まったのだろうか。本報告では、「ワールド・ミュージック」時代において、日本の音楽評論家たちがなぜ、いかにしてインドネシア大衆音楽を評価したのかを明らかにする。

「ワールド・ミュージック」は一般に非西洋圏の音楽文化を総称することばとして1980年代末頃から使用された。非西洋圏のなかでもアフリカや中南米、そしてインドネシアといった「第三世界」の大衆音楽が評価の対象となった。なぜ東南アジアのなかでもとりわけインドネシアの音楽が称揚されたのだろうか。

インドネシアの数ある音楽ジャンルのなかでも特に評価されたのは、クロンチョン、ダンドウット、ジャイポンガンの3つである。これらに共通するのは、その起源を西洋のみに求めるのではなく、さまざまな外来文化と土着的な要素が融合した「混血」の音楽であるという点であり、日本の音楽評論家は、これらの混血文化の魅力を紹介・説得するために、主に2つのロジックを用いた。

一つは、他地域との類似性による説得である。すなわち、アフリカ音楽やブラジル音楽といった（インドネシア音楽ブーム以前にすでに評価されていた）「第三世界」の混血音楽との音楽的・文化的・歴史的類似性によって、インドネシア音楽の魅力を論じる説法である。

二つ目は、他の音楽ジャンルとの差異化である。すなわち、ポップやロックといった西洋的ジャンルに対して批判的なまなざしを投げかけ、一方でそれとの対比によって、上記の非西洋的3ジャンルを評価する論法である。

上記二要素から主に構成される言説空間は、もちろん「〈ポピュラー音楽＝西洋〉という西洋至上主義的な中心／周縁史観に対する批判」といったワールド・ミュージック全体の基本的性格と通底するものである。しかしとりわけインドネシアの場

合特異なのは、その起源を西洋に求める「ポップ」に対する評価基準である。ポップのなかでも、そのなかに内在する土着性、庶民性、混血性、大衆性を読み取り、それらサブジャンルを評価の対象としていく一方で、それらの諸要素が希薄なポップに対しては価値貶下の言説をつくりだしていった。

本報告では、ワールド・ミュージック言説全体の傾向分析によって説明可能な部分を認めただうえで、各国の地域的文脈を踏まえた個別の事例研究の必要性を提示する。

〈傍聴記〉

本発表は、1980年代前半から90年代半における「ワールド・ミュージック」の興隆の中で、インドネシア音楽がどのように表象されていたのかを、そのイデオロギー的要素に焦点を当て、明らかにするものであった。

発表者は、まず「ワールド・ミュージック」の全体的な枠組みを説明したあと、その中でも特にインドネシア音楽が、注目されていく経緯について説明した。そして、カセットの流通により音源が大量に日本に持ち込まれたこと、安定した権威主義的な政治体制が情報収集を容易にしたこと、レコード会社がグローバル資本に汚染されていなかったことなどを指摘し、それらが中村とうようなどの影響力のある音楽評論家を、インドネシア音楽に傾倒させていく土壌を作ったのだと述べられた。

一方で、中村を中心とする音楽評論家たちが注目したのが、クロチョン、ダンドゥット、ジャイポンガンといった大衆音楽であったことが指摘された。中村らがそれらの大衆音楽に価値をおく根底には「混血文化」があったのではないかと、そしてそれは、「単一民族国家」日本との差異に根ざす願望であったのではなかったかといったイデオロギー的側面に対する指摘がなされた。

さらに、それらの大衆音楽をささえる混血性を「ワールド・ミュージック」のリスナーに納得させるために、すでに人気を博していたアフリカやブラジルのポピュラー音楽との類似性が持ち出されたことが、彼らの言説から説明された。その中で、「混血性」あるいはそれに類似した「土着性」、「庶民性」といった概念が、音楽ジャンルの「類似」と「排他」を決定する基準として固定化していくことになったと

結論付けられた。

聴衆からは、それらのイデオロギー的な言説が、最初のモチベーションとしてあったのか、あるいはそれは後付なものなのかという質問や、海外においてはインドネシア音楽の中で評価される基準が異なっている点や、インドネシア音楽が比較的未開拓なジャンルであったことが評論家達に注目された要因になったのではないかといった点が指摘された。

これまでアカデミズムから排除されがちであった、評論家達の言説をとりあげ、「ワールド・ミュージック」の歴史的動向を分析した、たいへん興味深い発表であった。

(井上 春緒 記)

お知らせ

◇学会運営の省力化、デジタル化促進のため、メールアドレスの登録・変更を、学会事務所（東京、LEN03210@nifty.ne.jp）まで、必ずお知らせください。ご協力をお願いいたします。

◇研究発表の募集

西日本支部の定例研究会で研究発表を希望される方は、発表種別（研究発表、修士論文・博士論文発表、報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、氏名、所属機関、連絡先（E-mail等）を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

◇新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、当面の定例研究会はオンラインで開催する予定です。オンラインを活用した支部企画、ご意見ご要望をお寄せください。最新の情報は随時、支部ウェブサイトに掲載いたしますので、ご留意ください。

（今号の編集担当者：竹内 有一、神野 知恵）

編集・発行：(一社) 東洋音楽学会 西日本支部

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 竹内有一研究室気付

東洋音楽学会 西日本支部事務局

TEL 075-334-2395 E-mail ytake2395@gmail.com

<http://tog.a.la9.jp/nishi/index.html>